

大学改革に向けての1つの提言

秋 田 清

4月から9月まで、イギリスのブリストル大学に留学させて頂きました。感心したり驚いたりしたことがいくつかありましたが、各学科でおこなわれていた教官のセミナーもそのひとつです。経済学科では、外部の講師を招いたセミナーと内部の教官が報告するものと毎週2つのセミナーをやっていました。他学科の人も関心のある人は自由に参加していたようです。私も哲学科でマルクスについての報告がありましたので参加しましたが、突然現れた東洋人に対してもなんの違和感も抱くことなく、まるで常連を迎えるような態度にはこちらが拍子抜けしたくらいです。報告も質疑応答も実に自由な雰囲気です。とりわけ専門外の人がなんの遠慮もなく、ちょっとした外れな質問をしているのは羨ましいかぎりでした。

これは真似をしない手はないと思いました。学長から、帰国報告をどこかでやれと言われましたので、短大部長と研究出版委員長にお願いして、継続的なセミナーの第一回目として帰国報告をかねて、大学改革に関する問題提起をさせて頂くことになりました(帰国報告の部分は省略)。

I

大学改革についての議論が盛んです。現在のわれわれの学問のあり方(主体と客体の分離、客体の法則、個別化、専門化、客観化)と言うのは、長く考えれば、7、8百年、短く取れば2、3百年くらい前から形成され、継承されてきたのですが、その学問自体がいま大きく変わりつつあります。この百年単位で考えた方がいいような学問の変化にわれわれが対応できているかどうか

が基本的な問題なのだろうと思います。文部省の大学制度改革に関する問題提起はこのことと無関係ではありません。この点を抜きに制度やカリキュラムをいじってみても何にもならないと思います。その限り文部省に盾突くなどということでは事足りりとするのは百害あって一利無しです。対応するための共同の研究と相互批判が必要です。新たな事態にかなりのメンバーが対応できる能力をつけきれなければ、大学がつぶれることは請け合いです。

共同研究と相互批判にとって、短大は多くの教官がどちらかと言えば専門技術を持っているに過ぎず、視野が狭いと言う欠点と同時に、きわめて有利な条件を持っています。それは学問の変化の内容と関係のあることですが、われわれは分野の違いはあれ直接「生活」を問題にしております。「新たな『地域生活』の模索」と言うことで短大の全学科の研究をくることが可能でしょうし、それこそが現在の、そして今後の基本的な問題になって行くことだと私は考えています。

「新たな『地域生活』の模索」ということで短大の全学科の研究をくることが可能かどうかについては違った意見があつて一向に構わないと思いますが、例えばこうした共通の課題を前提にして、それぞれの人がさしあたり持っている自分の専門領域から接近して、自分の専門分野の人が何を問題にしているかを、専門外のいわば素人に理解できるように報告し、専門外の人々から学んでいく。こうした作業が不可欠だと思います。

昔、大学紛争の頃「専門馬鹿」という言葉を投げられた教官が、「俺は確かに専門馬鹿かも知れないが、おまえらは専門も馬鹿だ」と答えた

と言う話がありますが、専門分野から逃避するために学際的などと言い出すとロクなことにはならないような気がします。そのうち専門などというのはなくなるか、少なくとも今と違ったことになるのだと思いますが、さしあたりは、それぞれが専門の領域を持っているということを前提に垣根を越えた議論が出来ればと思います。

II

このような観点にたつて、私の専門の領域からの話を以下する事にします。

私の専門は経済学史といひまして、経済学の歴史を勉強しています。過去の思想家たちの思想を解釈すること、整理することを通して、歴史を解釈し整理し、現在と未来の有るべき姿を考えているわけです。

すこし具体的にいいますと、私はカール・マルクスやアダム・スミスの研究をしています、そこで私が問題にしていることは、たとえばこんなことなのです。

しばらく前に、「～してる」、あるいは、「～する」という表現がはやったことがあります。主婦する、学生する、教師する、というように使いました。「私は学生です」とか「私は教師です」とか言い切ってしまうと、どうも自分のことではないような気がしてくる。学生であったり、教師であったりするの、世を忍ぶ仮の姿であって、ほんとうの自分は別にあるような気がする。でも別のものが何かははっきりしない。こんな状態に皆おかれているのではないかと思えます。(分業のなかに包摂され得ないほどに、普遍性を獲得していることによるのならばいいのですが、そうはいえないようです。ただし、分業の特定の分野に固執しなければ落ち着かないなどということがなくなっている程度には普遍性を勝ち取っているのかもしれない)。

こうした状況が歴史的に見てどういう意味があるのかというようなことを考えているわけです。少し敷衍します。

『一応族の反乱』(橘川幸夫著、日本経済新聞社、

1990年)という本があります。現在の状況を巧く表現していると思いますのでその序文の一部を引用します。

私たちの生活の中に「一応」という言葉が目立つようになったのは、いつごろからだろうか。

上司が「たのんでおいたしごとはやってあるかね?」と尋ねると「ええ、一応やっております」と答える若い部下。

「趣味はなんですか?」と聞かれて、

「一応テニスとかあ、やってます」と答える女子大生。

……………(中略)……………

注意をしてあたりを見回してみると「一応」という言葉が、私たちの生活の中に実に多く氾濫していることに気付くだろう。なぜ私たちは、「一応」という言葉を使うのか?

どうでもよいことに対してまで、なぜ思い切りよく物事の判断を下せないのだろうか? それは、個人的な性格や個々のシチュエーションによって左右されるのではなく、もっと主体の根本的なところで、私たちの判断を不安にさせる地殻変動が起こっているからではないだろうか。

……………(中略)……………

趣味も事業も人生すらも「一応」でしかない時代というのは一体、何なのだろうか。「一応」はあくまでも「一応」であって、結論でも到達点でもない。古い価値観の崩壊を知りつつ、その崩壊していく不安を日々感じつつも、新たに依拠する絶対的な価値観を持たずに浮遊する、曖昧な環境に生まれ育った世代を、私は「一応族」と名付けた。

社会的な価値観にたいする絶望と渴望、その曖昧さの中で「一応族」は「一応」という言葉を使い続けるしかない。お仕着せでありきたりの「絶対」にたいして屈服するのではなく、まだどこか遠くの方に可能性を信じている限り、現在は「一応」でしかないからだ。

少し前の時代であれば一応などという必要は

なく、はっきりしています。戦後すぐであれば、すべての人が食うために働くことがすべてでありましたし、それ以降、いわゆる高度経済成長時代は儲けること、物質的な豊かさが目標でした。見栄を満足させること、隣の人より1歩先に行くことがとても価値あることのように思えた時代でもありました。しかし今、とりわけ若い人々の間では、競争心などはほとんど意味を成さないようになってきています。また、豊かさの実現とともに「経済の時代」ではなくなってきています。たしかに経済学は、時代や地域によって内容はことなりますが、「貧困からの解放」をその課題にしてきました。しかし、「経済の時代」ではなくなってきているというのは、戦後の日本の発展過程の中で出てきた問題にとどまらず、ここ200年余り続いた経済社会、あるいは資本制社会の問題でもあります。

そして、このような変化は経済活動や経済学だけに起っているのではなく、20年来、さまざまな形で「知」の在り方の変化について(たとえば「体系知の崩壊」や「ファジー」について)論じられているように、すべての人間の活動や学問の上に起っています。もちろん、変化の先行きについてはまだなにも明らかではありません。そのかぎり、「今日、イデオロギーとか体系思想が総崩れした後の時代にあつて、ぼくらが依存すべき根のたしかな大樹など、もうどこにも存在していないということだ。だから、小さな木や、時には草に寄りかかつては(というより戯れて)、日々に分らしさと言うか充実感を確認してほっとするというのが、今日的な生き方」(夏村波夫『そして、みんなミーハーになった。』PHP研究所 1991年 P.22)なのかも知れません。

III

こうしたことについて、マルクスの歴史認識を使って、少し考えてみたいと思います。

ご存じのように15世紀半ばからおよそ300年続いた重商主義と呼ばれる時代を経て18世紀末にイギリスで資本主義社会が成立いたします。この社会を階級関係ではなく、商品生産と交換

を軸に捉えるとき「経済社会」と呼んでおります。自由と平等と「金勘定の世界」の成立です。

この社会は最大限の利潤をあげようとする資本家たちの活動によって動いて行きますが、問題にしたいのは、この経済社会が封建的な共同体の解体として生まれた点、つまり、自由と平等は裏を返せば競争と諸個人の対立であったということです。

マルクスはこれを人間の本質である自然性、共同性、意識性の疎外として捉えます。マルクスは彼が言う「人間の本質」である自然性、共同性、意識性は、疎外された形態においても、平たく言えば歪んだ形ではあれ資本主義社会においても貫いていくと言います。人間は自然破壊や公害を生み出しながらも自然にたいして働きかけることをやめるわけにはいかないし、それぞれの人が利害むき出しの商売でしかないとはいえ、他人との関係を断つわけにはいかないし、むしろその共同性を発展させていかにざるを得ないと言います。そして自由競争を叫びながら競争を制限するようなもの、独占や巨大な銀行組織を作り出さざるを得ない。つまりは競争の反対物である、社会の意識的組織化(人間的共同性の獲得)を生み出さざるを得ない、と言います。

管理通貨制度という言葉をお聞きになった事がありだと思いますが、かつては、それ自身が価値物である金が貨幣であったのですが、それが、兌換の銀行券に代わり、いまでは金との結びつきを欠いた銀行券が貨幣として流通しています。価値物である金との結びつきを欠いた銀行券は、なんらかの形で管理されなければ貨幣としての役割をはたすことができませんが、逆に云えば管理することが可能になったということでもあります。不換の通貨が流通しているということは管理することの出来るような制度、つまり社会の組織化が出来ているということでもありますし、そうした社会関係の体化物である不換の通貨を使って社会関係を管理できるようになったということでもあります。

こうして、人々が利潤を求めて行なう自由な活動を背後から規定する価値・価格法則は変質

し、社会全体の経済活動を人間が直接動かすことの出来る可能性が生まれています。個人の活動を背後から規定する外的強制力は変質し、部分的なものになっております。諸個人の活動にとって外的強制力となってあらわれる経済法則をその研究の対象として来た経済学は、その成立根拠を問われております。利潤の獲得(金儲け)だけが企業活動の目標だった時代も終わろうとしています(利潤を獲得するための企業から、生活としての企業へ)。同時に、経済活動が人間の他の諸活動から切り離され、独自の意味をもった時代も終わろうとしております。その時我々が、金儲けではない、他のどんな基準で社会を運営して行けるかが問われているように思います。

IV

こうした方向に企業や社会全体を変えていく原動力になるもの、それは多分一人ひとりの毎日の生活の在り方だと思えます。何を食べ、何を食べないか。何を着るか。どんな家、どんな地域に住むか。どんな人間とつき合うか、つき合わないか。どんな付き合い方をするか。このようなく普通の人間の、当たり前の毎日の生活の中で、何か新しい行動の規範や意味が生まれ出されるとすれば、それが多分、企業だけではなく、今後の世界を動かしていくのだと私は思っています。

衣食住などという些細なことなど重要でない、とお考えの方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、情報ネットワーク社会というのは、国家や国際政治などというものを、吹っ飛ばして、一人ひとりが直接世界の人々とつながる社会を内に孕んでいます。そうなったとき、日々

の生活の上にならなくてそれを些細なものとして見下している政治などは人間の生活にとってほとんど意味をなさないものになるでしょう。先ほど、短大の全学科の研究課題を「新たな『地域生活』の模索」ということでしてくれるのではないかとといった意味はここにあります。

ここでは、好き嫌いの問題、どういうときに豊かさや、楽しさや、心の安らぎを感じるかが問題です。新たな「知」の在り方もそこから生まれてくると思います。新たな感性を磨くこと、それにもとずいた知性を磨くこと、これが大学の課題です。

学生の中に、驚きや未知なものへの興味、感動を呼び起こすこと。自らの喜びや哀しみ、疑問や主張を素直に発言する楽しさを味わわせること。2年間で、新しい生活の発見、自らに対する信頼、ちょっと知的なおしゃべりができるようになれば、それが望みうる最大の成果であるのかもしれませんが。

こうした課題を果たすためには、教官は知識を授けるのではなく、新たな知の在り方を学生の中から、彼らとともに探り出すことが必要ですし、教官の研究会、授業内容、学生の反応に関する情報交換が不可欠です。

衣食住と地域生活をどのように豊かにしていくかが、人々の最大の関心事になろうとしている今、短大で研究していることはこれまでと質的に違った重要性をもってくると思います。それに応えようとすれば、18才人口の減少などは問題にならないでしょうし、応え切れなければ18才人口の減少とは無関係に大学はつぶれるでしょう。共同の研究と陶冶が必要な所以です(短期大学部セミナー、1991年12月4日報告、後、加筆)。